

「この時期になぜ被災地を訪れるのか」。

震災被災地の情報に日常接しない方には、ある意味当然の疑問かもしれない。発災後2年を経て、医療的なアプローチは一方的な支援の段階を脱して現地の医療を応援していくステージにあり、単発的・緊急的な取り組みの意味は薄れてきている。ま

してやゴールデンウィーク期間中の「訪問」にどれだけの意義があるのか。
 コムネットの菊池恩恵社長を団長とする10人の「三陸被災地

歯科訪問団」はその回答を見つめるため、宮城県南三陸町・石巻市雄勝町を巡り震災から約2年2カ月後の被災地を視察した。企画・運営など幹事として参加させていただき、個人での支援とはまた違った意義を感じた。

私は、「報道だけでは現地の実災害(ガレキ)除去後の平原に見た桜の花の色は、まるで違ったのではないかと思う。今は何もない荒地には2年前のあの時刻までごくありふれた日常の営みがあったと実感されたのではないだろうか。

東北地方の外はもちろん、復眼レフで被災地の光景を切り取り続けていたF先生は、そのレンズのように大きな瞳に被災地の光景をしっかりと焼き付け「参加して、本当に良かったです」と言い、SNSのフェイスブックで手記を執筆し始めた。現地を体感した人から周囲にさざ波が広がっていく、幹事としてはこれに勝る喜びはない。現地での案内から宿でのレクチャーまで、何から何までお世話になった雄勝歯科診療所の河瀬聡一朗先生とスタッフの皆さま、南三陸町社会福祉協議会の歯科衛生士の三浦夕さんもきつと同じ気持ちだろう。

被災地訪問が未来を創る



南三陸防災庁舎の説明をする三浦夕さんの解説を聞く。彼女は発災直後から医療支援に携わっている

情の一部しか理解できない、訪問して肌で感じるものが不可欠」と各種媒体を通じ訴えてきた。そしてその活動に関心を寄せてくれる友人知人に参加を募ったところ、応じてくださった方の約半数は被災地は初めてだった。

「2年たつて、まだこの状況か」という光景を初めて目にし、被災した方の生の声を聞き、被

興景気でにぎわう仙台市内ですら日々風化し、人々の意識から遠のいていく沿岸の被災地。さらに被災地内でも復興の度合いは中核都市とへき地では大きな格差がつき始めている。その現状を歯科医療という切り口から眺めた時、自分には何ができるのか。自分自身への問いかけから全てが始まる。

長い髪をなびかせ、愛機の一

次の日程は未定だが被災地歯科訪問団をまた企画したいと思う。目立った成果が上がる活動とは言えないが、その小さな一歩がいつか、私たち自身や次の世代のより良い未来を創ることにつながると思っている。